食品の知名度に関する実態調査 -大学生のイメージによる-

○鈴鹿医療科学技術大 木村雅美、大阪成蹊女子短大 東歌子、

姫路短大 生野世方子、甲子園短大 太田美穂、兵庫教育大 織部ミチ子

〔目的〕 近年、日常使用する食品は、バイオテクノロジーを始めとする科学技術の発達により、品種改良、新食品の出現、新しい加工食品の開発などで激増している。また、日本食品成分表に掲載されている食品数も、三訂食品成分表（昭和38年）では878種が掲載されていたが、四訂食品成分表（昭和57年）で1621種に増加している。このように増加傾向にある食品をどのくらい知っているのかを調査し、食教育の基礎資料とする。今回は、学生の食品に対するイメージから調査を行なったので報告する。

〔方法〕 大学2校、短大3校の学生285人を対象に平成6年7～11月に、穀類、芋類、魚、肉類、野菜類などの17項目について、回答時間20分で、イメージによる自由記述方式の調査を実施し、回収率100%である。

〔結果〕 知名度の高い食品は、米、じゃがいも、さつまいも、牛肉、豚肉、わかめなどであり、これらは90%以上のものが知っており、これらの食品は日常よく食べる食品でもある。また、種実であるナッツ類を豆類として捉えていたり、緑黄色野菜とその他の野菜（淡色野菜）の区別が曖昧になっているのが見られる。その他「シーチキン」「味の素」「ふじっこお豆さん」などの商品名が一般的に食品名として定着しているのも見られる。

今回は、時間を20分と制限し、時間内でのイメージにより調査したものであるため、本調査に挙げられた食品は、日常よく食べる食品、好き嫌いのある食品、印象の強い食品、食品としての知識が定着しているものなどが考えられる。